

【24】 圃隱集

刊3冊

〔跋〕 圃隱先生文集跋

圃隱先生詩集跋 新溪開刊跋

圃隱先生詩集重刊跋

〔小口〕 (墨書) 圃隱集

〔書名よみ〕 ほういんしゅう 〔著編者〕 鄭夢周・鄭宗誠
〔写刊年次〕 未詳。萬曆乙酉年(萬曆一三・二五八五) 刊の後印か。

〔外題〕 圃隱集 一(〜三)

〔帙外題〕 圃隱集 三冊

〔内題〕 圃隱先生文集卷之一(〜卷之三)

圃隱先生譜攷異卷之四

圃隱先生集本傳卷之五

圃隱先生行狀卷之六

圃隱先生集附録卷之七

圃隱先生詩集跋卷之八

圃隱先生集新增附録卷之九

〔その他〕

〔序①〕 圃隱先生詩卷序

〔序②〕 圃隱先生詩集序

〔序③〕 圃隱先生詩藁序

〔序④⑤〕 圃隱先生詩卷序

〔序⑥〕 圃隱先生詩集重刊序

〔目録・目録尾〕 圃隱先生文集目録

〔巻尾〕 圃隱先生文集卷之一(〜卷之三)

圃隱先生集行狀卷之六

圃隱先生集附録卷之七

圃隱先生詩集跋卷之八

圃隱先生集新增附録卷之九終

〔版心〕 圃隱集

〔残欠状況〕 全 〔保存状況〕 良好 〔装訂〕 袋綴 五針眼(赤糸)

〔丁数〕 ①九四、②六一、③六四丁 〔本文用字〕 漢字 〔二面行数〕

一〇行(二行二〇字) 〔匡郭〕 四周子持双边 〔界線〕 界線あり 界

高一九・四糎、界幅一・五糎、上欄高・五・九糎、下欄高三・一糎 〔版心〕

上下黒花魚尾 〔表紙〕 黄色・卍繋ぎ紋型押 〔法量〕 縦二九・二×

横二〇・三糎 〔料紙〕 楮紙 〔書入〕 ナシ 〔印記〕 ナシ 〔備考〕

帙あり。帙は茶色無地布地、縦二九・五×横二〇・七糎。帙は小破してい

るものの、原装と推される。

〔原刊記(巻九尾題の下に)〕

丁巳重刊

〔刊記〕 ナシ

〔解題〕

本書は、李氏朝鮮時代に刊行された朝鮮版の一書である。内容は、朝鮮高麗末期の文官・学者、鄭夢周(チョン モンジユ、一三三七〜一三九二)の詩文集である。「圃隱」とは、鄭夢周の号のことをいう。

鄭夢周の漢詩や文章を、息子の宗誠が散逸した記録などから集めて刊行したもので、初刊本が世宗二十一年(一四三九)に刊行された後、数度にわたり、増補改訂し、刊行された。その本文は、『韓国名著大全集』や『韓国思想大全集』に収録されるなど、韓国でも著名な詩文集であ

る。本書に刊記はないが、序跋の年記から、嘉禎年間（一六三五年頃）に刊行されたものと推察される。

『圃隱集』三冊の構成は、全九卷十附録（神道碑銘など）となっている。以下、円覚寺本『圃隱集』の構成を示す。

第一冊は、序、目録、卷一・二である。卷一・二は、鄭夢周の詩をまとめて所載する。卷一に一二〇編、卷二に一三〇編を載せる。序は六点ある。成立にも関わる重要な情報のため、それぞれの序の作者名と、明記されているものはその年記を以下に列挙する。

〈序①〉 圃隱先生詩卷序

正統三年四月日／權採奉教序

〈序②〉 圃隱先生詩集序

萬曆乙酉（萬曆一三（一五八五））七月初三日

左議政^臣盧守慎奉教謹序

〈序③〉 圃隱先生詩藁序

永樂己丑（永樂七（一四〇九））秋八月甲子門生嘉善大夫

芸文館提學同知經筵春秋館事兼判内瞻寺事密山卞季良謹序

〈序④〉 圃隱先生詩卷序

晋山府院君浩亭河崙序

〈序⑤〉 圃隱先生詩卷序

正統二年丁巳（一四三七）三月下澣門生前崇政大夫吏曹判

書修文殿大提學雲峯朴信謹序

〈序⑥〉 圃隱先生詩集重刊序

崇禎己亥（崇禎乙亥（崇禎八・一六三五）か）臘月初十日

後學恩津宋時烈序

題を載せる。卷之三は「雜著」八編、「拾遺」「遺墨」とする。目録は、卷三までを記し、卷四以下は目録に載らないため、卷三までの段階で、目録が作成されたものと考えられる。

第二冊は、卷三〜六を所収する。卷三は「雜著」、「拾遺」、「遺像（肖像）」（高麗侍中圃隱鄭先生遺像／萬曆丁未三月日識）からなる。卷四はその内題を「圃隱先生年譜攷異卷之四」とあり「年譜」を載せる。卷五はその内題に「圃隱先生集本傳卷之五」とあり、「鄭襲明傳」などの諸伝を載せる。卷六は内題を「圃隱先生集行狀卷之六」とし、行狀をまとめて収載する。卷六の末尾には、「永樂庚寅三月日門人推忠翊戴開國功臣資憲大夫東原君宝文閣提學咸傳霖撰」とある。

第三冊は、卷七〜九に、附録が付される。卷七は、内題を「圃隱先生集附録卷之七」とし、卷七の冒頭に、「牧隱李穡跋（年記未詳）」を載せ、続けて、「圃隱齋記／歳己未春二月庚申韓山牧隱李穡記」、「送鄭達可奉使日本詩序 李崇仁」、祭文・祝文の後、「碑閣詠跋 姓裔生員鄭琚／嘉靖四十三年甲子六月上澣謹跋（謁画像詞以下三篇疑萬曆丁未重刊時新增）」を載せる。

卷八は、内題を「圃隱詮慧史詩集跋卷之八」とし、以下の跋を収載する。

〈跋①〉 圃隱先生詩集跋

正統四年己未（一四三九）三月 日折衝將軍龍武侍衛司上

護軍兼知兵曹事男宗誠謹跋

〈跋②〉 圃隱先生詩集新溪開刊跋

嘉靖癸巳（一五三三）仲秋下澣判書柳溥謹跋

〈跋③〉 圃隱先生文集跋

弘文館提學五衛都摠府都摠管^臣柳成龍奉教謹跋

〈跋④〉 圃隱先生詩集重刊跋

萬曆丁未（一六〇七）暮春下澣後學夏城曹好益謹跋

以上のように六つの序がある。序の次に、目録を掲載する。目録は、卷之一に「詩」とし、一二〇編の詩題を、卷之二に「詩」一三〇編の詩

（卷之八尾題の次、卷之九の前に）

〔跋⑤〕 圃隱先生文集重刊跋

崇禎紀元後四丙寅（一六三一）仲春下浣後学大匡輔国 崇

祿大夫行議政府右議政兼領 經筵事監春秋館事豊山柳厚祚

瑞拝謹跋

（崇禎元年は一六二八年、「後四」は一六三一年。ただし、一六三二年の干支は辛未で合わない）

卷九は、内題を「圃隱先生集新增附録卷之九」とし、祭文・祝文・辞など様々な附録を収載する。尾題を「圃隱先生集新增附録卷之九終」とし、尾題の下に「丁巳重刊」と刊記を記載する。「丁巳」は、『日本現存朝鮮本研究 集部』^①には、次のように記す。

卷九尾題下に「丁巳重刊」とあり、これは一般に肅宗三年（一六七七）と考えており、特に確証はないが、筆者もこれに従っておく。

なおこの前の丁巳は、萬曆四十五年（一六一七）である。

卷九尾題の次丁に、「圃隱先生神道碑銘^{并序}」があり、さらに「圃隱先生神道碑統記／後学安東権尚夏敬書」、続けて「榜目」（版心に「圃隱先生榜目」とする）を記す。

以上、全三冊の構成を示したが、詩文集に、様々な附録が付帯しており、その年記を見ても、増補された過程がうかがわれる。

本書の複雑な構成と形成過程について、一九六四年に丸亀金作氏が、架蔵本と稲葉氏所蔵本をもとに検証し、論文にまとめているため、以下に、丸亀論文を参照しつつ、紹介する。

鄭夢周は、洪武二十五年（一三九二）に殺害される。海豊郡に葬られたが、その後その遺体は、太宗六年三月になり、竜仁県に移葬することになった。この頃、遺子の宗誠・宗本の兄弟は、父の遺品を集めて整理し、将来出版して後に遺したいという希望を持っていた。詩百編ほどを集め、門下生で芸文館提学である卞季良と、親しい間柄であった河崙の

序をもらうように取り運んだ。河崙の序には年記がないが、河崙の没年は太宗十六年（一四一六）であり、卞季良が序文を書いた永樂己丑（太宗九年・一四〇九年）と同じ頃のものと考えられる。

この二人の序文を付してまとめたのが鄭夢周の詩文集の最初の形と推される。この状態で刊行を願ったが、残念ながらその機を得ないまま時が過ぎていた。世宗二十一年（一四三九）、朴信が序を書いた年、世宗は圃隱の詩巻を閲覧感嘆し、権採に命じて序を作らせた。また同じ世宗二十一年に鄭宗誠が跋文を付している。恐らくこの年には『圃隱集』が刊行されたのではないかと考えられるが、これもこの年の刊行を証明する徴証がなく、定かではない。

この後さらに集められた鄭夢周の詩文を加え、中宗二十八年（一五三三）に、柳溥が跋文を書いた。この年、世臣が主となり、新溪で開版した。これがいわゆる新溪本である。

その後、中宗から宣祖にかけて、開城本、弘書館本が刊行された。宣祖十七年（一五八五）、宣祖は柳成龍に命じて、校正をさせる。柳成龍は、新溪本・開城本・弘書館本とを対照し、高麗史等を参照して校正を行った。宣祖十八年（一五八六）、宣祖は盧守慎に命じて序を作らせた。この時に詩文の作品は、三〇二篇となり、年譜・校異と共に四巻となった。

宣祖四十年（一六〇七）、壬辰の戦禍に喪失してしまったため、臨臯書院の院生の主唱によって、柳永詢・黄汝一が助力して、重刊した。この重刊本が、以後広く行われることとなる。

孝宗十年（一六五九）に、後孫の維城が永川に重刊した。東洋文庫所蔵前間恭作氏寄贈本の『圃隱集』は「康熙初年永川旧刻本九卷二冊」とあるとのことである。また英祖四十五年（一七六九）に、崙陽書院で開刊、李太王四年（一九〇六）には、後孫の煥翼が崙陽書院で重刊したという。丸亀氏蔵本は、弘書館本系統であると述べている。

なお、この丸亀論文には「追記」があり、名古屋市立鶴舞図書館に所

蔵される『圃隱集』三冊が紹介されている。分量も異なり、十行十八字とあるので、本書とは異なる版とわかる。

他に伝本を探すと、韓国ソウル市の国立中央博物館所蔵『圃隱集』（所蔵番号、購入五九〇）がある。これは、WEB上の解説によると、上下二冊、寸法が縦二五・八×横一八・五糎で、糸綴の製本、末尾に「丁巳重刊」と記し、萬曆四十五年（一六一七年）の刊行と考えられている。詳細は不明ながら、寸法をはじめ、他の情報からは、円覚寺本と異なる版本と判断される。

藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究 集部²』には、数点の『圃隱先生集』『圃隱先生文集』を掲載する。番号一〇四九『圃隱先生文集』九卷三冊（東京大学図書館所蔵³）は、「神道碑銘」「圃隱先生榜目」を備えた三冊本という点で、円覚寺本と一致する。

円覚寺本『圃隱集』は、全三冊で九卷（十附録）である。原装と判断される帙は、この三冊に合わせて作られており、もともと四冊であったものが一冊欠けて、現状三冊となったものとは考えにくい。

また序跋を見ていくと、柳成龍の名や、盧守慎の序は確認できるが、柳永詢や黄汝一の序跋が確認できない。また序跋の年記で最も新しいものは崇禎年間のものであるため、本書は、朝鮮版の通例で、刊記が示されないが、内部徴証から、崇禎年間に重刊されたものと推察される。

円覚寺本の原装と思われる帙は茶色無地の布地が貼られ、刷題箋がある。題箋は縦一三・七×横五・〇糎で、双辺。「圃隱集 三冊」とある。各冊の表紙は、朝鮮版で典型的な黄色地に卍繋ぎ模様・型押し紋の表紙に、赤紐での五針眼（五ツ目綴）である。帙は破損しているが、三冊の本は、少しの虫損・汚損は見られるものの、状態は良い。書入などは一切ない。

最後に、本書に所収された詩文の作者、鄭夢周について説明する。鄭夢周（一三三七～一三九二）は、諱をはじめ夢蘭、ついで夢竜、のち夢

周と改めた。字は達可、号は圃隱、諡号は文忠という。父は儒学者の鄭雲官で、幼い時から学問に励み、朝鮮の歴史を学んだ。一三五八年に開（現在の開城）で監試という、高麗における最高教育機関である成均館の試験に合格し、一三六〇年には科挙に主席で及第した。その後、恭愍王から恭讓王までの四代に仕えた文官である。一三六一年に芸文館検閲に任命された後、礼曹正郎、成均館博士、大司成、政堂文学などを歴任し、門下侍中まで上った。

日本との関わりも深い人物で、日本に来たこともあった。永和三年（一三七七）に、海賊禁制を求める使者となって日本へ渡り、博多で九州探題今川貞世と交渉し、倭寇によって捉えられた俘虜数百人を伴って帰国することに成功している。また元・明の交替期に明へ二度向かい、親明派として活躍した。

李氏朝鮮の末期、恭讓王四年（一三九二）に、李成桂を王に推す計略をはばもうとして、李成桂第五子の芳遠（のちの太宗）のはなった刺客に、開城の善竹橋で殺された。李成桂一派の王権篡奪に異を唱え、強く反対し、信義を重んじ節操を貫いて懐柔されなかったためだと言われている。鄭夢周は、あくまでも李王朝のみに忠誠を尽くすべきであるという信条を曲げなかったのである。

鄭夢周の祖国を想う深い忠節心や、母国を想って変節せず、その結果殺されてしまったその生き様から、鄭夢周は、朝鮮において大変崇敬され、敬愛されていた。後世の儒者たちからは、朝鮮性理学の祖として仰がれた。多くの弟子を育成したため、李穡は「東方理学之祖」と称えられている。著作に、使節として日本を訪れた折に見聞した日本の風物を伝えた『奉使日本作』や、王朝への思いを詠んだ詩である『丹心歌』が知られている。

墓の前には紅箭門（フンサルムン）という、朝鮮において聖なる場所の入り口に設けられる門が建てられている。この門は、垂直に立てられた二本の円柱と、その間に渡された二本の横木から構成され、屋根も扉

もなく、門の中央上部にはトリシューラ（三叉槍）の象徴と太極の文様が置かれた。「紅箭門」は、「赤い矢の門」という意味で、上部の先の尖った釘を並べたような部分に言及した名称である。赤い色で塗られているのは、魔除けの意味があるとされる。朝鮮王陵などに用いられる他、朝鮮朝（李氏朝鮮時代）には、夫に殉じて命を絶った妻、孝行を尽くした子供など孝誠を顕彰するために建てることがあり、この門が建てられることは、一族や村にとっても光栄なこととされた。この門が建てられることは、一としての紅箭門が、鄭夢周の墓に建てられているのである。

鄭夢周には様々な逸話が伝えられている。鄭夢周は、幼い時から秀才で知られていた。九歳の時のこと、夫と離れて暮らすことを悲しんでいた使用人の女性のために詩を作ったが、その詩があまりにも素晴らしく評判になるなど、幼いときからその逸才が知られていた。また科擧を首席で合格し、官吏になった時のこと、母の作った礼服は、通常は裏地が白と決まっているものを、赤地で作られていたため、鄭夢周は不審に思っ母に尋ねたところ、母からは、「忠臣になる心を忘れないために」との思いから赤地で作ったと聞かされ、生涯「忠臣」であることを忘れなかったという話など、様々な逸話とともに、広く崇敬されている人物なのである。

なお、円覚寺には、本書の他、多数の朝鮮版や『尊周彙編』などの写本を所蔵している。円覚寺が朝鮮本を所蔵する理由には、円覚寺第二十六世義観の弟である篤弥（とくや）（明治二年（一八六九）〜大正十三年（一九二四））が、明治二十三年末から京城に渡っていることが考えられる。京城には、外務省が李氏朝鮮に日本の商品を販売するために設置した京城商品陳列所という施設があり、篤弥はここで主任をしていた。また義観も明治四十三年に渡鮮しているため、直接に、あるいは篤弥を紹介して入手した可能性が考えられる。

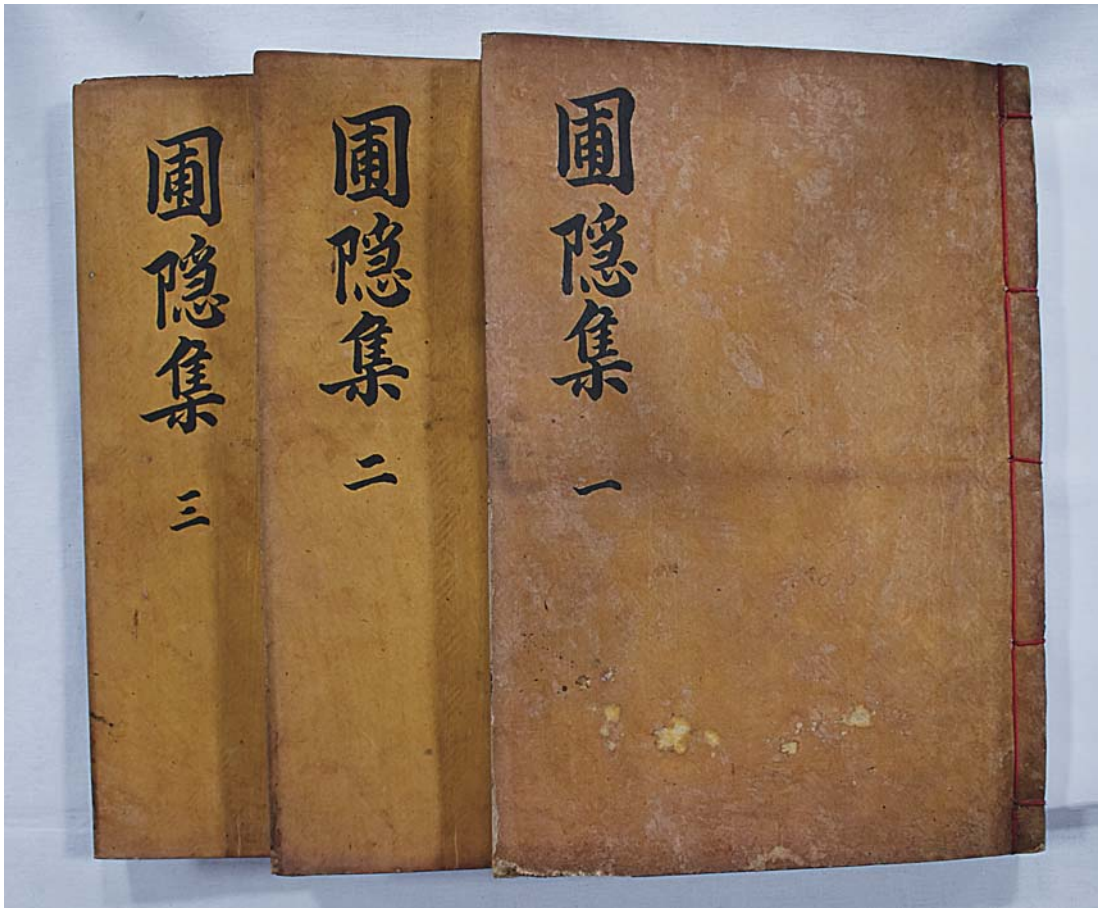
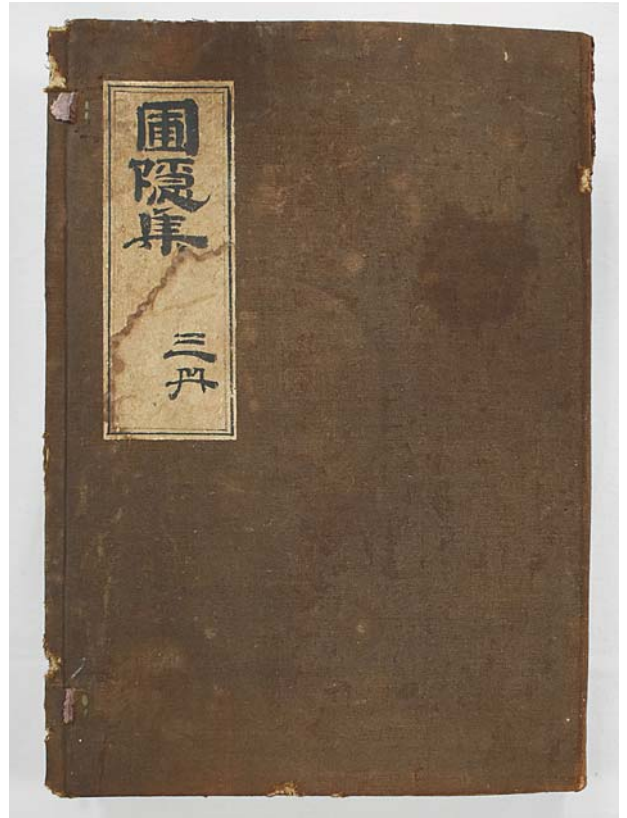
〔注〕

- (1) 藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究 集部』（京都大学学術出版会、二〇〇六年）による。
- (2) 前掲注（1）を参照。
- (3) 東京大学図書館の所蔵番号はE四三一五四七。

〔参考〕

- ・丸亀金作「圃隱集についての覚書」『鈴木俊教授還暦記念 東洋史論叢』鈴木俊教授還暦記念会、三陽社、一九六四年
- ・朴美子「圃隱鄭夢周の「食藕」詩小考」『大谷森繁博士古稀記念 朝鮮文学論叢』白帝社、二〇〇二年
- ・藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究 集部』（京都大学学術出版会、二〇〇六年）
- ・藤本幸夫「日本現存朝鮮本とその研究」『日韓の書誌学と古典籍』アジア遊学一八四、勉誠出版、二〇一五年
- ・奉成奇（翻訳・金子祐樹）「韓国古文獻の基礎知識」『日韓の書誌学と古典籍』アジア遊学一八四、勉誠出版、二〇一五年
- ・国立中央博物館（韓国ソウル市）WEBサイト <https://www.museum.go.kr/site/jpn/relic/search/view?relicId=2707>（二〇一九年十二月二七日閲覧）
- ・『韓国名著大全集』（ハングル、大洋図書、一九七三年）
- ・『韓国思想大全集』（良友堂、一九九四年）

（渡辺 麻里子）



圖隱先生詩卷序

文以載道故詩書禮樂威儀文辭皆至道之所寓也三代以上文與道為一三代以下文與道為二益詩三百蔽以思無邪之一言夫子之文章無非天理之流行所謂有德者必有言而文與道初無二致也漢魏以降以文鳴於世者若王徐阮劉曹鮑沈謝下逮唐宋劉柳蘇黃之輩代各有人然不過風雲月露模寫物狀併儷沿襲之工耳其於道也槩乎其未有聞也故其文章雖或可取夷考其行皆無足論所謂有言者

夫豈小補哉

正統三年四月日通政大夫承攸院右承旨經筵
參贊官寶文閣直提學知製教兼判軍資監事
知戶曹事臣權採奉 教序

圖隱先生詩集序

恭惟我

主上殿下以麗相鄭文忠公可班宋明二忠臣命臣並序其集臣謹就而讀之伏見太宗大王亟贈諡以旌之四聖迭御以列三綱傳配崇義殿祀孔子廟賜院額書田至于聖上又錫扁致祭今復有是命益歎夫宏規遠猷卓越前古萬萬也臣嘗謂勳為社稷臣法為王者師是必有使之為生民萬

以傳諸後吾邦文獻不足乃至此乎雖然觀示為所立而於詩數章味嘆之淫泆之亦足以知其學矣何事於以多為貴

皇明萬曆乙酉七月初三日左議政臣盧守慎奉
教謹序

圃隱先生詩藁序

天地大矣而人乃一粟於其中形孰小焉古今
久矣而人過一瞬於其間時孰近焉形雖甚小
而有可以參天地而並立者焉時雖甚近而有
可以貫古今而不朽者焉是必有不依形而立
不隨死而亡者矣天地也古今也苟求其所以
然則與人之所以為人者初豈有大小久近之
可言也哉古之人有見乎此者矣未嘗不淵冰
戰兢於平居之日而卒然遇夫大變也則有捨
生而不顧殺身而無悔焉者蓋亦欲以全夫此

其所立之卓由其所見之明而所見之明則亦
諸是詩而亦可驗者以竣後之知言者云永樂
己丑秋八月甲子門生嘉善大夫藝文館提學
同知經筵春秋館事兼判內膳寺事密山下李
良謹序

圃隱先生詩卷序

嘗謂孔子刪詩止于三百篇然而原於天理人
倫而達乎政教風俗上自郊廟朝廷之樂歌下
至閭閻委巷之諷詠凡可以感發善心而懲創
逸志者無不具焉則詩之為詩豈在多乎哉詩
變而為騷騷變而為詞賦再變而五七言出至
于律詩則詩之變極矣然而思無邪之一言可
以蔽三百篇則詩之道亦豈多乎哉圃隱先生
鄭公以天人之學經濟之才大鳴前朝之季今
其子宗誠宗本以其遺藁來示予且請予曰吾

哉嗚呼先生出處始終大致有國乘在茲不
焉晉山府院君浩亭河崙序

國隱先生詩卷序

先生麗朝之忠臣以斯道為出處者也方麗
運之衰君失其道自絕于天我

太祖康獻大王在屯之初九陽德方亨能以濟
屯之才盤桓居貞故天乃眷顧付畀神器於
是謳歌訟獄爭歸焉英雄豪俊景附焉當是
時也先生在塞之六二志在濟君欲行其道
然天之所廢孰能過之一朝致死於所天而
國隨以亡五百年王氏社稷之臣唯先生一
人而已嗚呼貞哉蓋我

國隱先生詩卷序

二

叙平生功業之始末以傳不朽云耳

正統二年丁巳三月下澣門生前崇政大夫吏

曹判書修文殿大提學雲峯朴信謹序

國隱先生詩集重刊序

天地之理未嘗有無漸而成者春夏之陽始於
前冬枝柯之繁肇於纒落故天將啓漢家之治
道則文章已變於戰國之世將興洛建之道學
則五星已聚於五季之時蓋理有漸而氣先至
也唯我東方表為大國上世益質質而夷也自
殷師以洪範之道來設八教而三綱明九疇叙
矣其後數千餘載而我國隱先生挺生麗季盡
忠所事畢命改社其扶倫立彞之功固足以軒
天地曜日月然此則素稟文山之事爾不足為

國隱先生詩集重刊序

三

而窺測則真所謂豪傑之才聖賢之學後之觀
者知吾言之不誣也嗚呼世道已季俗尚愈下
慨前哲之益遠悼斯文之將墜輒書是說以附
于四編之端俾知東人受先生罔極之恩而又
知斯文興喪實有所係云爾

崇禎己亥臘月初十日後學息津宋時烈序

前按使洪公處厚遜歸後按使閔公熙以先生
外裔繼助斯役又命工匠終始相成而事在序
文既受之後故未
得並錄于序文中

國隱先生詩集重刊序

三

圖隱先生文集目錄

卷之一

詩

三月十九日過海宿登州公館郭通事

押馬船阻風未至因留待

蓬萊驛示韓書狀名尚質

龍山驛

黃山驛路上

書諸橋驛壁上

萊州海神廟

圖隱先生文集卷之一

資憲大夫知中樞府事兼同知 經筵春

秋館事弘文館提學五衛都摠府都摠管

臣柳成龍奉 教校正

三月十九日過海宿登州公館郭通事金押

馬船阻風未至因留待校正館本三月
上有丙寅二字

登州望遼野邈矣天一涯溟渤限其間地分夷與

華我來因舟楫利涉還可誇昨日海北雪今朝海

南花夫何氣候異可驗道路賒客懷易悵夢世事

喜蹉跎偕行二三子相失迷風波終夜苦憶念耿

非非

奉使遊桑域從人間土風染牙方是貴脫屣始為

恭柳入新年綠花如故國紅客居殊寂寞喜聽足

音聲

遊觀音寺

野寺春風長綠苔來遊終日不知回園中無數梅

花樹盡是居僧手自栽

再遊是寺

溪流遶石綠徘徊策杖沿溪入洞來古寺閉明僧

不見落花如雪覆池臺

圖隱先生文集卷之一

圃隱先生文集卷之二

癸卯八月從韓元帥東征到咸州兵馬使羅公率精兵助征西北

聯鞍千里遠從軍欲到咸州又送君故是男兒腸斷處秋風畫角不堪聞

和州夜雨

和州客舍雨連明門外猶聞刁斗聲帳裏將軍呈燭坐曉來贏得鬢絲成

至咸州次楊若齋詩

落葉正續紛思君不見君元戎深入塞驕將遠分

圃隱先生文集卷之二

三十一

送宋正郎按廉慶尚道名明 字宜之 諡

四海風塵急東方歲月遲山川周道直旌旆漢官儀馬首樓臺好人間雨露滋故人天上客相送賦新詩

圃隱先生文集卷之二

圃隱先生文集卷之三

雜著

松軒李侍中畫像讚

風彩豪俊華峯之準智略渙雄南陽之龍或判事廟堂之上或披勝帷幄之中過洪流於滄海扶日出於咸池求古人於簡策蓋如公者幾希

楊若齋銘

惟天之行日九萬程須更有間物便不生逝者如斯哀來無已一念作病血脈中否君子畏之夕惕乾乾積力之極對越在天

不勝惘惘餘希順序自玉只此昏黑草草
別後懸渴多也即辰動止何如區區亦無恙母勞
念及僕於今月十九日批超拜密直提學深懼元
滿日夜不安惟先生想登此意餘莫萬萬珍重只
此鄭某再拜十一月二十四日
崔鄆之女之母揆亦真兩班也余聞之三寸李敬
之判書

遺墨

七月廿一日奉

佳幸甚之再三乃知

超然於物外者其出詭亦幾然非後人之可及

也曠江吾所居也亦

先生之所知不謬

先生之先君翁菴也南里不遠為之悵然以世

國隱先生集卷之三



高麗侍中圃隱鄭先生遺像

按洪武二十二年己巳恭讓王新即位以先生有大勳勞於國家命立閣圖形時先生年五十有二也子孫因歲于家廟後摹寫奉安于臨皋崧陽兩書院今又依摹綉梓置于年譜之上使學者開卷肅然有以瞻仰而起慕云
萬曆丁未三月日識

圃隱先生年譜攷異卷之四

臣按圃隱集今身行於世者有三本新溪本開城本及校書館本而惟新本最久開館本則皆近歲所印也首卷年譜未知初出於誰手而三本各有詳略日月不同其間大義所關亦多舛錯以起後人之惑臣据行狀本傳參以麗史與公詩集及一時諸賢寄贈之語反覆尋考正其訛謬且依韓文攷異之例分注略載三本附以臆見去取之意以俟後之博聞者正焉

版於深谷至辛丑春草創祀廟于雲山下權安位版而享祀之以喪亂初定凡具未遑也至壬子就青林舊基重新廟宇乃先奉安圃隱先生癸丑冬 賜額
崇禎二年己巳又奉榮陽公位版合享于烏川書院烏川本迎日縣新羅介烏支縣在今慶州東北四十里東濱海距京都八百里以烏川在其地故別號曰烏川
先賢舊鄉
榮陽公鄭先生以迎日人高麗睿宗朝擢第

官至樞密院知奏事子孫世居焉中移于永川至十一世孫圃隱先生嘗往來于茲但今未的其闕里耳圃隱先生赴金陵至中國之諸城驛有詩曰永野田宜稻烏川食有魚我能兼二者但未賦歸歟先生自註云永川烏川皆吾鄉里則此其往來之跡
本新

圃隱先生集本傳卷之五

鄭襲明傳

鄭襲明迎日縣縣本新羅斤島人個儻奇偉力學能文以鄉貢登第屬內侍仁宗朝累轉國子司業起居注知制誥與郎舍崔粹宰相金富軾任元敬李仲崔奏等上書言時弊十條伏閣三日不報皆辭職不出王為罷執奏官減諸處內侍別監及內侍院別庫召粹等令視事襲明獨以言不盡從不起右常侍崔灌獨不與上書供職如常議者鄙之襲明尋陞禮部侍郎毅宗即

圃隱先生集本傳

圃隱先生集行狀卷之六

行狀

公姓鄭諱夢周字達可號圃隱慶州府迎日縣人遠祖襲明以名儒仕高麗仁宗朝官至樞密院知奏事曾祖仁壽贈奉翊大夫開城尹上護軍祖裕贈奉翊大夫密直副使上護軍考云璫贈順德守義誠勳翊祚功臣辟上三韓三重大臣守門下侍中判兵曹事上護軍領景靈殿事日城府院君妣永川李氏贈卞韓國大夫人贈官署丞約之女也妣有娠

圃隱先生集行狀

圃隱先生集附錄卷之七

書江南紀行詩藁後

予既冠遊燕京壁水弦誦之際與四方同舍問其鄉里古聖賢之遺跡及其衣冠風俗山水景致各各不同默自計僥幸試中當乙外補或承差走四方必足履自覩狀後懷吾志然後歸老子家歲甲午僥幸世科入翰林兆足以行矣而天下大亂親又老棄官東歸遂至于今衰且病四方之志掃地矣自奉金陵正朔以來見吾曹馳駟南去未嘗不歎羨其行而益歎吾身之衰

圃隱先生集附錄

吾志之不遂也今讀鄭五宰江南行蔓田橫韓
信李績等詩感吾之心多矣陳教論熊鷹詩豪
放不似和韻至於歌詠 大朝間暇之氣像陳
述小邦傾嚮之精誠所謂詩史也其餘詠物遣
興雜篇咀嚼有餘味予於是躍然自幸乃曰宗
之從公為書狀官歸而求跋其在塗詩文公又
不鄙微予言年前年後隨隱歸必不靳相示吾
雖閉門高卧江南一片盡在吾目中矣何必勞
吾身然後快吾志耶於是樂為之書牧隱李稽
跋

圃隱齋記

予讀魯論至樊遲請學圃夫子曰吾不如老圃
予以謂遲也從聖人久矣仁義禮樂之不問而
汲汲於此果何意哉聖人之志未嘗忘天下遲
也不及知之歟聖人雖自道吾少也賤故多能
鄙事然委吏乘田皆在官者也在其官則盡其
職盡其職者非獨聖人為然凡為君子之所共
由也沮溺耦耕之對不恭矣夫子責之曰鳥獸
不可與同羣則聖人之志在天下可謂至矣老
而不遇也刪定讀修垂教萬世則若可以農圃

凜乎不可尚已而泯沒無傳莫使後人知之則
先生感夢構屋之意安在哉自洪武歷建文至
成化其間按此道者凡幾人而必見於先生之
夢則豈惟文丞相忠義伯內先生肝膽相照而
已先生肝膽若不相照於文忠公則百載之下
森然相感於夢寐之間豈至如是我尤不可無
傳於後世者也茲用謄書華詠揭于壁上并叙
感夢構屋之意俾傳後世云 嘉靖四十三年
甲子六月上澣謹跋 謂畫像詞以下三篇篇疑
萬曆丁未重刊時新增

圃隱先生集附錄卷之七

圃隱先生詩集跋卷之八

吾先人所著詩文不為不多然自以不滿其
意旋作旋棄而間有收錄亦且不少不幸遭
家之故遺失殆盡今所存者特百中之一二
耳其使日本所作只得叔父司宰令蹈所抄
錄十三首而已餘皆逸又其平日所作為諸
家所藏者及洪武丙寅奉使
大明行錄皆門人咸平定公傅霖所鳩集而歸之
者也宗誠又得若干首摠三百三首先人四
赴 京師俱有所作丙寅之錄幸賴書狀官

大德於無窮云

正統四年己未三月 日折衝將軍龍武侍衛
司上護軍兼知兵曹事男宗誠謹跋

圍隱集跋

圍隱先生詩集新溪開刊跋

公之大節著於

太宗大王之褒美公之詩文見於前後諸公之

詠歎其不偉歟今我

聖上復獎節義之臣誕舉錄用之典以激勸萬

代之人心公之玄孫世臣首膺

寵命倅新溪縣戴念公之性情所發乃在詩集

鳩工壽梓以廣其傳庶幾旌異之札忠貞之

銘同歸於不朽為人子孫篤好祖先道義不

墜永世其意蓋可賞也已

圍隱集跋

三

嘉靖癸巳仲秋下泮判書柳溥謹跋

圍隱集跋

三

圍隱先生文集跋

大廈將傾而一木扶之滄海橫流而一葦抗之
知其不可而猶且為之者分定故也古人云天
地生人各無不足之理常思天下君臣父子有
多少不盡分處所謂分者何也天之所以命物
而物之所以為則者也然則木之支廈分也葦
之抗海分也臣子之忠孝於君親而竭誠盡節
以至捐軀殞命者亦分也學者學此而已知者
知此而已行者行此而已盡此者聖勉此者賢
如此而生如此而死得喪禍福隨其所遇而吾

圍隱集跋

四

有古今之殊裁是集之行將見忠孝之道蔚興
於東方各盡天賦之分以為國家無疆之休也
審矣臣不揆愚陋樂為之言資憲大夫知中樞
府事兼同知 經筵春秋館事弘文館提學五
衛都總府都總管臣柳成龍奉 教謹跋

圃隱先生詩集重刊跋

書院諸生一日來見余起而言曰我圃隱先生
詩集之傳廣矣有新溪開城及館本然三本互
有得失所載年譜亦皆踈略舛錯故相西崖柳
公成龍奉

聖教考正雙勘文字援據事蹟頗精博重刊于本
郡壬辰島夷之變蕩然為灰惟書院所藏一帙
諸生擔之而走問關山谷以得保而亦不免有
墜失徧求士人家得一舊本以補闕遺然後始
為完本生等思所以壽其傳以是請于方伯柳

亦可謂知為政之本矣讀是編者誠能置心平
易如橫渠之說徐徐玩味如朱子之言雖一事
一物之微一字一句之義而必求先生之所以
用心反覆涵泳有以得其性情之正則秉彝好
德之心油然而露而自不可禦以之邪可以閑
以之善可以勸是則先生之教不為不至而學
者之得亦未必不滋矣不然徒求文字之妙不
思用意之濃竊其聲響模其葩藻以為鑿米畫
脂之資而已則已失先生為教之本意而亦非
方伯與太守之所以望於後生者後生勉之哉

柳公名永諡黃侯名汝一
摩丁夫暮春下澣後學夏城曹好益謹跋

圃隱先生詩集跋卷之八

圃隱先生文集重刊跋

圃隱文忠先生文集原集三卷昔龜山楊氏有言曰唐虞以前載籍未具而當是之時聖賢若彼其多也下歷秦漢以迄于今文字之多不可以數計然曠千百年欲求一人如顏曾者而不可得則是道之傳固不在文字而古之聖賢所以為聖賢者其用心必有在矣味斯言也聖人之與天地同其大實不在為文而悅人宜於務養情性上出來故病世之為學者不知反約窮源持不逮之資而急知有此記覽論說而已

圃隱先生文集跋

而遺外敦本而黜浮萬一以先生之道之所存闡明遵守則其於務養情性之實庶幾其有所得矣蓋相與勉之哉至若先生蓋世之功業賢日之忠赤前以扶麗氏五百年之綱常後以啟本朝萬億代之名教書之簡策昭揭宇宙者餘事耳茲不夏贅而只略書所感於心者如右
崇禎紀元後四丙寅仲春下浣後學大匡輔國崇祿大夫行議政府右議政兼領 經筵事監春秋館事豐山柳厚祚端拜謹跋

圃隱先生集新增附錄卷之九

麗末圃隱鄭文忠公以真儒王佐才出為世用最為

聖祖所知屢辟幕下回軍之後同升為相文忠與金震陽諸公忘身循國欲扶社稷時

聖祖功業日盛羣下歸心勢難終於北面文忠協謀傾之

太宗嘗告

太祖曰鄭魯周豈負我家

太祖曰我遭橫讒魯周以死明我若係干國家有

圃隱集新增錄

九終

丁巳重刊

圃隱先生集新增附錄卷之九終

丁巳重刊

圃隱先生神道碑銘并序

圃隱先生既歿二百八十有餘年後學思津宋時烈為之說曰道之在天下者未嘗亡而惟其托於人者有絕續故其行於世者不能無明晦此正朱夫子所謂是皆天命之所為非人智力之能及者也嗚呼若先生者豈非其人歟先生挺豪傑之才負特立之資當麗運之將訖其盡瘁所事臣道畢備者固已垂諸冊書與古人並駕麗氏之有先生豈不幸歟雖然先生天為我東生之也我東僻處夷服中至周武王時殷太

圃隱先生神道碑銘

丁巳重刊

圃隱先生神道碑銘續記

生道迫紫陽學祖述憲章躬行必得其在文席攘斥百家橫說豎說一此無他第所論說聽者疑惑及得胡通無不符合地遠世後若航斷港因言得意痕血獨捧爾後諸賢承繼張皇歷選前後其功莫當若宋濂翁始建圖書以授關洛以傳閩甌此殆天啓統會宗元凡我後學永泝其源

圃隱先生神道碑續記

按麗史壬申四月臺府之請按趙浚鄭道傳等也先生之分禮曹判書過司宰令踏實致聞焉及事讎就鞠吏議當斬賴我聖祖寬大之德只流遠地嗚呼先生所樹立固已卓卓如彼而斯二公者亦同心不貳視死如歸五百年正氣可謂咸萃於一門矣茲事不載原文故謹據記如右俾後人攷信焉仍竊念先生大節人莫不仰止而惟其繼開之功則知者或鮮至我尤翁始乃闡發無餘然則大碑之成於

圃隱先生神道碑續記

丁巳重刊

數百年後其亦有待歟斯役也老峯閑相公鼎
重實經紀其緒賴而克克其尊賢衛道之誠士
林亦不可不知也

後學安東權尚夏敬書

至正二十年庚子十月二十五日恭愍王九年新

京東堂及第榜目

乙科三人

國子進士鄭夢周年二十四本迎日

父成均服膺齋生云瓊

祖直長同正 裕

曾祖檢器監 仁壽

外祖膳官署丞李約本永州

國子進士林璞年三十四本古安

父追封御史大夫 成贊

國志卷之四

太史監候李乙年

父別將同正 信

祖

曾祖

外祖